

國學院大學學術情報リポジトリ

『紀ノ川』による「日本回帰思想」の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Japanese return, negation of negation, The River Ki 作成者: 孫, 源 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001625

『紀ノ川』による「日本回帰思想」の一考察

A Study of Japanese Return Thought from The River Ki

孫 源

キーワード：日本回帰 否定の否定 紀ノ川

Key words: Japanese return negation of negation The River Ki

要旨

20世紀50年代から60年代にかけて、経済的に成長した「豊かな社会」の到来にしたがい、日本文化の独自性及びそれが日本近代化における重要性を提起する論著が次々と出現した。文学作品にも日本文化と伝統の継承を主題とするものが現れ、1959年に刊行された『紀ノ川』がそのひとつである。『紀ノ川』は昭和時代において活躍していた女性作家有吉佐和子の自伝作であると見なされ、この小説から「日本回帰思想」が窺えられると思う。本稿は主に『紀ノ川』をめぐって、時代特徴と社会発展の中における三代の女の葛藤及び作者の一貫した思想について論述し、その中に反映されている「日本回帰思想」について考察してみたいと思う。

Abstract

In the 1950s and 1960s, with the rapid development of economy, Japan successively appeared relevant works that emphasized the uniqueness of its own culture and its important position in the process of modernization. In the field of literature, there are works with the theme of inheriting Japanese culture and tradition. For example, the novel The River Ki published in 1959 is one of them. The River Ki is the autobiographical work of Ariyoshi Sawako, a female writer in the Showa Era, which shows her understanding of return thought. This paper will discuss the relationship between the three generations of women in the novel and the author's attitude towards the Japanese tradition in combination with the characteristics of the times and the background of social development from Meiji Era to Showa Era, so as to investigate the Japanese return thought embodied in the novel.

一、はじめに

50年代の日本経済が「高度成長」の段階に入り、『日本文化の雑種性』（加藤周一 思想 1955年6月号）、『文明の生態史観序説』（梅棹忠夫 中央公論 1957年2月号）、『タテ社会の人間関係』（中根千枝 講談社現代新書 1967年）のような日

本文化の独自性及びそれが日本近代化における重要性を提起する論著が次々と出現した。また、文学作品にも日本文化と伝統の継承を主題とするものが現れ、1959年に刊行された『紀ノ川』がそのひとつである。

『紀ノ川』は昭和時代において活躍していた女性作家有吉佐和子の自伝作であると思われ、この小説から近代以来の「日本回帰思想」の形成とその流れが窺えられると思う。

小説には明治・大正・昭和と、三代にわたる家系の歴史が描かれている。明治初期、日本は富国強兵をめざし、西洋の近代思想や生活様式を積極的に取り入れようとした。当時、この「文明開化」の風潮が東京などの大都市を中心に日本全国に広まった。しかし、明治20年代初期になると、政府の欧化主義に対し批判的な態度をとる三宅雪嶺や、キリスト教排斥、日本主義の立場を主張した高山樗牛などの人々が現れた。特に1890年に、教育の根本に天皇中心の国体思想を据えた『教育勅語』が發布された以降、民族主義及び国粋主義が盛んになりつつあり、「日本精神」を強調する傾向が現れた。小説の主人公の一人である花はこういう時代に生きて、古風に育てられた彼女は日本伝統の代表人物であると思われている。花の娘の文緒は大正の民主主義の中で生きていた女性である。「日本精神」を強調する明治20年代と異なり、ヨーロッパ文化を積極的に取り入れる大正時代において、文緒が母に反発し、伝統的なものに否定の気持ちを持っている。1950年代に入ると、日本は経済的に成長した「豊かな社会」が到来し、「敗戦日本の「自信喪失」からの回復が、知識人の「日本回帰」という形で現れてきた」⁽¹⁾と思われる。有吉佐和子の分身とみなされる華子は昭和の生まれで、また母の文緒と異なっていて、日本伝統への憧れを示していた。

こうして、明治以来の日本文化に対する認識は次のような一定のパターンを示していると思われる。日本学者の青木保が『日本文化論の変容』という著作の中に、戦後日本の文化を論じる際、日本の知識人が日本文化に対し、「否定的特殊性の認識」から「歴史的相対性の認識」へ、また「歴史的相対性の認識」から「肯定的特殊性の認識」へと、という変容があり、さらに「肯定」は前時期の「否定」と「相対性」という見解を否定する意味も含んでいると論述した。そこに自国文化にたいする否定の否定の認識を積み重ねる傾向がみられ、『紀ノ川』における女性

(1) 青木保. 日本文化論の変容. 中央公論社, 1990年, P68.

三世代の伝統にたいする態度もこのような傾向を示している。

本稿は主に時代特徴と社会発展の中における三代の女の葛藤及び作者の一貫した思想について論述し、その中に反映されている「日本回帰思想」について考察してみたいと思う。

二、『紀ノ川』における女性三世代の関係

紀ノ川沿いの旧家、明治・大正・昭和、三代の女性を描いた『紀ノ川』は、28歳の有吉佐和子の出世作にして代表作の一つである。まず作品と作家の関わりを簡単に述べてみることにする。

『紀ノ川』は1959年、『婦人画報』の1月号から5月号までに連載した作品であり、単行本として刊行されたのは同年の6月である。有吉佐和子の年譜⁽²⁾にあわせてみると、和歌山市の出身、ジャワにおける海外生活、祖父の職務、ニューヨークからジャワに転任した父親の勤務先など、『紀の川』における人物設定と共通するところが多いため、三代目の主人公の華子が作者の分身であり、『紀ノ川』が有吉佐和子の自伝作であると思われる。明治時代の主人公の花は有吉佐和子の敬愛する祖母のイメージを土台にした人物であるといわれ、1955年の秋、祖母ミヨノが脳溢血のため亡くなったが、この作品に亡き祖母を慕うという作者の思いを寄せたと考えられる。

さらに、有吉佐和子の作家生涯において、『紀ノ川』は重要な位置を占めている。「昔人々が生きていたように、今も人間は生きていて、そして未来も人間は生きるだろう——私の伝統に対する態度も、こう考えが固ったのは、この作品によってであり、一人の人間の思考や行動の背後には、過去から連綿と続く人間の大きな意志が賭けられているのだと疑わなくなったのも、『紀ノ川』を書いて以来である」⁽³⁾とあるように、有吉佐和子の作家生涯において、取って代われない重要な作品として、『紀ノ川』は作者の伝統に対する認識、つまり有吉佐和子の伝統観が作品に潜ませられていると考えられる。

(2) 井上謙・半田美永・宮内淳子、有吉佐和子の世界、翰林書房、2004年、P276。

(3) 有吉佐和子、作家の自伝109有吉佐和子、日本図書センター、2000年、P186。

(一) 明治時代と花

幕府末期の1853年、アメリカ軍艦4隻が浦賀に現れ、日本へ開国を求めた。脅威を受けた日本は明治維新、とくに「版籍奉還」「廃藩置県」などが展開された。また、日本政府は富国強兵をめざし、文化や国民生活の近代化を促進する必要から、西洋の近代思想や生活様式を積極的に取り入れようとした。当時、この「文明開化」の風潮が東京などの大都市を中心に日本全国に広まった。

1873年、岩倉具視は欧米を巡りウィーン万国博覧会を見て、西洋文明が各国国民の「自主の精神」に発すると感慨した。それに先立って、福沢諭吉も『学問のすすめ』の中で、西洋文明の真髄を個人と国家の独立に求めた。そのほか、板垣退助らの「自由民権」運動も等しく個人の自由を確立し人民の権利を主張する運動であった。以上のいずれも明治初年の代表的なものとし、この時期の日本の風潮を表している。

しかし、明治20年代初期になると、政府の欧化主義に対し批判的な態度をとる三宅雪嶺や、キリスト教排斥、日本主義の立場を主張した高山樗牛などの人々が現れた。特に1890年に、教育の根本に天皇中心の国体思想を据えた『教育勅語』が発布された以降、民族主義及び国粹主義が盛んになりつつあり、「日本精神」を強調する傾向が現れた。その原因について、石田一良が『日本文化史』の中で、次のように分析している。「文明開化の運動の間に、またその果に、愛国の運動は期待に反して、二つの点で国家の独立を危なくするおそれがある、と考えられ始めた。第一には、(中略)日本国は西洋化の代償にその「根拠」を失い、独立を達成しようとしてその「個性」を喪いつつある。(中略)第二には(中略)幕末には外部から脅威を与えた西洋が、文明開化運動によって内化せられ、国の内部から国家の独立を脅かすものとなりつつあると懸念せられるようになったのである」⁽⁴⁾と、二つの「おそれ」にまとまった。

さらに、この時期の風潮については「国粹主義者は西洋文明の摂取について批判的な態度をとった」「明治二十年代のはじめに発布された『帝国憲法』『旧民法』や『教育勅語』も、こうした精神の流れに沿うものと考えられる」⁽⁵⁾と、石田一良が述べている。

(4) 石田一良、日本文化史—日本の心と形、東海大学出版会、1989年、P207。

(5) 石田一良、日本文化史—日本の心と形、東海大学出版会、1989年、P211-212。

『紀ノ川』の主人公である花はこういう時代に生きて、小説全体を通じて最も重きがおかれている人物である。

若く死んだ花の母親のかわり、祖母の豊乃は花を育てていた。「一人娘に生まれて育った豊乃は、自分が受けたような教育を花にほどこすことによって、花を豊かに成長させたいと願ったのだ。紀州の名家である紀本の家系が、その名のとおり花によって花ひらいたと思えるように、花は美貌を備えていた。そして豊乃の願望に応じて賢く育っていた。茶の湯も奥儀を極め、書を能くし、箏も免状をとり、豊乃の躰に言葉遣いも礼儀も正しい分別を心得ている」⁽⁶⁾とあるように、花は古風に育てられていた。

結婚適齢期に達する21歳の花は、人生ではじめて祖母から離れ、その地方の名望家である真谷家に嫁ぐ日に、祖母と二人きりで慈尊院に参り、廟の前の柱にぶら下がっている数々の乳房型に気が付いた。「幼い頃から見慣れていたものののに、この日殊更のように花がそれに眼を奪われたというのは、花の母親が花を身ごもったときそうしたように、豊乃も何十年の昔に花の父親を産むときそうしたように、花自身もまた近い将来そうするであろうと考えたからである。市の和歌山高等女学校で女大学を学んだ花は、結婚の意義と女の役目の一つは子を産み家系を保つことにあると信じていた」⁽⁷⁾という花の思いであったが、祖母と母のように旧家に一生を捧げようとする花は、伝統的な女性であることは明らかになる。

花はしだいに年をとっていくが、夫の真谷敬策は、県会議員となり、議長となり、晩年には代議士にもなった。妻として、また息子二人、娘三人の母親として、花は社交、家事、姑の世話、息子娘たちの教育など、心労は絶えないが、家の大黒柱のような存在となる。娘の文緒の口での「新時代ちゅうもんはとんと分らへん」「唯々諾々」⁽⁸⁾としている母親の花は、有吉佐和子の分身である三代目の華子からみれば、優雅で親しみやすい女性である。花は旧家に一生を捧げ、すこしも退縮せず、むしろ周囲を征服していくようである。その包含力と生命力について、非常に有名な一節であるが、花の娘の文緒に、叔父の浩策が語る次のような言葉がある。

(6) 有吉佐和子。『紀ノ川』。新潮文庫、1964年、P9。

(7) 有吉佐和子。『紀ノ川』。新潮文庫、1964年、P7。

(8) 有吉佐和子。『紀ノ川』。新潮文庫、1964年、P132。

「お前はんのお母さんは、それやな。云うてみれば紀ノ川や。悠々と流れよって、見かけは静かで優しゅうて、色も青うて美しい。やけど、水流に添う弱い川は全部自分に包含する気や。そのかわり見込みのある強い川には、全体で流れこむ気魄がある。昔、紀ノ川は今の河口よりずっと北にある木ノ本あたりへ流れとったんやで。それが南へ流れる勢のいい川があって、紀ノ川はそこへ全力を注いだんで、流れそのものが方向を変えてしもうたんや。」⁽⁹⁾

花の性格を、紀ノ川に喩えてあらわした適確な言葉である。夫の真谷敬策のために全力をそそぎ、家のことを一生の仕事とし、夫や家の運命に従いながら、逆に運命を根づよく左右していくような一種の魔力を発揮する。静かに青く流れている生命の底には強い力が潜んで、その力は、ほかでもなく紀ノ川に似た女の生命力である。言わば男に従いながら逆に知らず知らずのうちに、男や子供に影響を及ぼしているのが花である。

(二) 大正時代と文緒

日露戦争の勝利によって、「明治維新以来の国家目標はいちおう達成されたという気持ちが国民のあいだに強まり、国家主義に対する疑問がうまれてきた」⁽¹⁰⁾と思われる。大正時代の特徴について、石田一良が次のように述べている。「欧米から次々に輸入される新しい思想に促されて「新時代」の政治的・社会的・思想的運動が展開した。大正時代は第二の欧化時代であった。明治時代において日本人の関心は天皇と国家に集約していたが、大正時代には、外は世界・人類に、内は一般大衆に向かって開かれたのである」⁽¹¹⁾、つまり外は、「富国強兵」の成果をさらに推進しようとした日本は西洋文化を積極的に吸収するようになったと思われる。内は、軍閥・官僚の専制打破、政党政治の実現、普通選挙の実施を目標とした大正デモクラシー運動が展開し、指導理論家としての吉野作造が民本主義を掲げ、その背景には、護憲運動、桂内閣解散などの事件があった。

1914年、第一次世界大戦が起こり、「大正3年6月の第一次世界大戦によって、日本の資本主義の強大化は促進され、産業拡大に伴う労働者の増大、護憲運動の主力である都市労働者、学生、教師、ジャーナリスト達の階層意識の自覚の高ま

(9) 有吉佐和子。紀ノ川。新潮文庫、1964年、P135。

(10) 石井進・笠原一男。詳説日本史。山川出版社、1996年、P284。

(11) 石田一良。日本文化史—日本の心と形。東海大学出版会、1989年、P223。

りは、民主主義的な風潮をもたらした」⁽¹²⁾と、新保哲が『日本の文化思想史』の中で述べている。花の娘の文緒はこのような大正の民主主義の中で生きていた女性である。

敢然として古いものに抵抗し、反逆精神を徹底的に発揮していた文緒は、良妻賢母の母にたいし、ひどい反感を持っている。「お母さんは古うて古うて、どないにもなりません。私の行動を制限するんやったら、日本女性の敵です。同性だけに許せませんわ。親やなかったら……」⁽¹³⁾と言った場面もあった。祖母の豊乃から受けたとおりの教育法を、長女の文緒にほどこそうとした花は、娘に反抗されても、茶の湯、華道、琴など、雅やかな婦徳を養うべき古来の稽古事に、厳しく文緒を通わせたが、文緒は全く関心すら示さなかったのである。

文緒の母に対する反感について、東京女子大学に行く日が迫ってきた頃、叔父の浩策に語る次のような言葉がある。「思えば思うほど古臭い家やなあ思うて、この家から飛び出て行くんか思うたら胸がときめきますわ」⁽¹⁴⁾と文緒が言って、さらに「十年前に青踏社ができて、世間の女は随分目覚めてきたのに、お母さんの旧態依然には私もう我慢ようしません。東京へ出たいという第一の願いは、長福院たらいう勿体だらけの家から飛び出すことですねん。女性の先覚者になろうと自惚れることはできませんけども、少くともお母さんのよな昔風の婦女にはなりとうないのですわ」⁽¹⁵⁾との言葉がある。母への反発は実は旧家への憎悪であり、懷疑もなくずっと旧家を見守る花がその旧家の代表であると文緒が思っている。「民主主義」や「自由」や「女性の先覚者」などは何の意味であろうか、明確に分からなくても、少なくともいまの古い家から飛び出し、「旧態依然」としている母から離れようとしている、という文緒である。

(三) 昭和時代と華子

20世紀30年代からの戦争は日本の一つの節目となり、1935年に「国体明徴」が発表され、翌年には文部省に日本諸学振興委員会が設置され、1937年には教学局も新設されたように、日本政府は国体精神の普及に努めていた。太平洋戦争で

(12) 新保哲. 日本の文化思想史. 北樹出版, 1994年, P172.

(13) 有吉佐和子. 紀ノ川. 新潮文庫, 1964年, P118.

(14) 有吉佐和子. 紀ノ川. 新潮文庫, 1964年, P132.

(15) 有吉佐和子. 紀ノ川. 新潮文庫, 1964年, P138.

は、日本はアメリカとイギリスを敵視し、「鬼畜米英」と呼び蔑視した。また、精神面について、戦争下の国民精神総動員が唱えられた状況のもとで、大量の文学作家は執筆を禁じられ、思想家・評論家・学者なども自由な言論がさまたげられ、日本の知識人は徹底的に統制されるようになった。

第二次世界大戦敗戦後、アメリカ軍に進駐された日本はいわゆる「第二の開国」が始まった。アメリカ文化をはじめとする外来文化が「文明開化」時期に劣らない勢いで日本に流入してきた。国家主義、軍国主義の思想は姿を消し、「国体」も改造され、伝統文化のかわりアメリカ文化は高く評価された。

戦争の終結にしたがい、日本の知識人はようやく戦争下におけるきびしい文化統制から思想・信仰・言論の抑圧がとりのぞかれるようになったが、ポツダム宣言受諾の無条件降伏や原子爆弾の投下など、敗戦による屈辱感や学界における「自信喪失」をもたらした。桑原武夫は『現代日本文化の反省』（1947年）において、日本で社会性を自覚しない、思想と体験を欠いた「私小説」しか生まれなかったという「近代性」を欠く日本の現代文学の現状を批判した。川島武宜の『日本社会の家族的構成』（1948年）は、日本の「家族的原理」を親分—子分的結合の外に対する敵対的意識や、個人行動と個人的責任感の欠如などにまとめ、日本社会の基本枠組である「家族」の性格を検討した。こうして、日本文化や日本社会を批判的にとらえる論点が続出した。

1950年代に入ると、52年4月の独立と朝鮮戦争の特需景気を背景に、日本は新しい時代を迎えた。青木保がその時期について、「敗戦国日本は経済的な「離陸」をはじめた」⁽¹⁶⁾と述べている。

50年代の経済の高度成長により、日本の学者は自信を持ちながら日本文化の独自性及びそれが日本近代化における重要性を提起するようになった。加藤周一の『日本文化の雑種性』いわゆる『雑種文化論』（1955年）は、日本人の「和洋折衷」的生活様式を肯定し、西洋のような純粋文化に対し劣等感をいだくことなく、文化の雑種性に積極的な意味を認めた。梅棹忠夫の『文明の生態史観序説』（1957年）は日本を西欧と同じく第一地域に分類し、近代化の過程に入った後、日本も独自の近代文明を作り出す「平行進化」論を提出した。中根千枝は「集団」及び「組織」における「タテ性」を発見し、『タテ社会の人間関係』（1967年）にお

(16) 青木保. 日本文化論の変容. 中央公論社, 1990年, P64.

いて、日本文化の独自性と近代化における意義を論じた。

また、文化論と同じように、文学作品にも、いわゆる「満州」から日本に帰国することを主題とする阿部公房の『けものたちは故郷をめざす』（1957年）、明治末期から大正にかけて、子供の眼から見た福井の村の日常を描いている中野重治の『梨の花』（1957年）など、日本本土に着目した小説も続出した。

こうして、「敗戦日本の「自信喪失」からの回復が、知識人の「日本回帰」という形で現れてきた」⁽¹⁷⁾と青木保が指摘している。『紀ノ川』は1959年に出版された伝統の流れを主題とする作品で、作者有吉佐和子も前述の知識人の一人とみられる。彼女の分身とみなされる三代目の華子は昭和の生まれで、母の文緒のような伝統に対する反抗性を一変させ、昔の人を懐かしむ心を持っている女性である。

父親の勤務先のジャワに連れられて出たまま、六年ぶりに日本に帰った華子は、小学校三年生にもなったが、桜の花と桃の花の識別もできない少女である。花は心配で「日本のあらゆるものに反撥していた娘は、その子供を常夏の国で育てて完全に古い日本と絶縁させるつもりだったのだろうか」⁽¹⁸⁾と思っていた。外国で育てられたため、母親の日本伝統への反発のため、父親から自由意識を尊重されていたため、絶縁は確かに絶縁されたが、「自由の中で時々呼吸困難に陥っていた」少女は、かえって何か頼りになれる「日本の古いもの」を握ろうとしていた。華子には母の文緒のような反抗性がなく、祖母の花と親しくなり、花の話にはたいへん興味を持っているようである。

華子は桜の花と桃の花とを分別したり、常夏の国の緑と紀州の浅緑とを比較したり、紀ノ川の流れと自然の運行としての四季の推移などにショックを受けたり、戸惑いを覚えたり、まるで異文化体験のようである。「外地で暮らした経験のある人々には、例外なく故国への憧れが強い」⁽¹⁹⁾と有吉佐和子自身もいったが、自分の分身である華子にもそういう「憧れ」を託すのではなかろうか。ずっと旧家を見守っており、伝統的な稽古事を身につけている花は、むしろ華子の接触した最初の「日本的」な人である。祖母への愛情も日本または日本伝統への情熱だと言ってもよいであろう。

花、文緒、華子と、三代つづいた女のことが物語られているが、感じるのは時

(17) 青木保。日本文化論の変容。中央公論社、1990年、P68。

(18) 有吉佐和子。紀ノ川。新潮文庫、1964年、P214。

(19) 有吉佐和子。作家の自伝109有吉佐和子。日本図書センター、2000年、P9。

の流れのはやさである。明治、大正、昭和、日本の敗戦と、急速に時代は変わってゆく。

花の夫の真谷敬策が突然病気のため急死し、真谷家の明治大正時代もこれで終わった。それから戦争の激化、やがて敗戦となるわけだが、有吉佐和子は細部にいたるまでこの一族に起こった移り変わりを克明に描いている。花は病床に死を待つ身となったとき、東京で編集者をしている華子は、臨終に近い祖母を訪れて、花が昔なつかしんだ『増鏡』を、枕元で読んできかせる場面がある。

「この人の血が、私にも流れていると思うと不思議だった。が、ふとそう気がつく、華子は自分の躰の中に真谷家の執念が、どくどくと音をたてて注ぎこまれるのを感じた。いや、紀本家の豊乃から、花へ、そして文緒から自分へと確かな絆が力強く繋がれて、花の胸の鼓動が直かに華子の胸に響いているのを、華子はそう感じたのだ。読んでいる増鏡の意味を汲もうとする余裕は失われた。何千年の間に、何億もの人々の信仰を堆積している仏像に向かって、経文を誦する僧の心理はこうもあろうかと思うようだった。増鏡を、祖母に対する孫娘の孝行として読んでいるとは華子はもう思わなかった。花を通して、家に生まれて死んだ多くの女たちの黝んだ生命を受け取るために、やるべきことはこれだけだと信じて、華子は憑かれたように読み続けた。」⁽²⁰⁾

『紀ノ川』を支えている作者の思想が、ここに最もよくまとめられていると思う。花が祖母の豊乃から女としての婦徳を学び、一生身をもって実行しているが、文緒は昔というものと断ち切ろうとしている。しかし、華子はまた昔の人を懐かしむ心を持ち、祖母の居る世界に憧れている。この手紙によると、その互いに合わなさそうな母と娘をつらぬくものは「血のつながり」というものであることがわかる。明治、大正、昭和と、時代は変わっていくが、豊乃の信念が花へと、また花のいのちが、その娘から孫娘へと、ふしぎな伝わり方をしていく。女何代もの関係はこういうふうが続いてきて、これからも続いていくといえる。

三、『紀ノ川』における「日本回帰思想」

「日本文化は伝統文化に対し、保守性があり、(中略)古くから伝わってきた宗

(20) 有吉佐和子、紀ノ川、新潮文庫、1964年、P288-289。

教意識、倫理観、生活習慣などはずっと日本人の思想と生活を支配している」⁽²¹⁾と、中国学者の韓立紅が述べている。前述の各時代の特徴が示しているように、日本または日本の知識人は時代と社会の発展に即した自律的な発展を探ってみる傾向が示されている。

日本学者の木村時夫も『日本文化の伝統と変容』の中で、次のように述べている。「日本歴史を通観して感ずることは、常に古くからの伝統的な文化要素と、海外から摂取したところの外来的な文化要素とが、同時に併存しているということである。そうしてこれら二つの文化的要素は時代によってそれぞれの比重を変化させ、それによって各時代の特殊性を展開している。すなわち或る時は外来の文化要素が伝統的文化要素を圧倒し、政治も社会も文化も外来の文化を基調とし展開するかと思えば、次には伝統的文化が台頭して外来的文化要素をしりぞけ、時に排外的な様相をすら呈する。要するに日本の歴史は前記二つの異なる文化要素の隆替の展開過程であったといえる」⁽²²⁾、つまり伝統文化と外来文化は併存し、時代によって繰り返されていると思われる。

さらに日本学者の青木保が戦後日本の文化を論じる際、日本の知識人が日本文化に対し、「否定的特殊性の認識」から「歴史的相対性の認識」へ、「歴史的相対性の認識」から「肯定的特殊性の認識」へと、という変容があり、さらに「肯定」は前時期の「否定」と「相対性」という見解を否定する意味も含んでいると論述した。そこに自国文化にたいする否定の否定の認識を積み重ねる傾向がみられ、『紀ノ川』における女性三世代の伝統にたいする態度もこのような傾向を示している。

有吉佐和子と、岡本かの子の長男、日本の芸術家である岡本太郎との間に次のような対談がある。

「今までの伝統的なひよわさをひっくり返す態度を作ることが芸術の第一歩であると思う。……」と岡本が述べたが、有吉佐和子は「さっき、伝統をひっくり返すといわれましたが、力を持っている伝統を掘り下げることの方が大事なので、伝統に対して覆さなければいけないという考え方を私はもちません。覆すことより、そこから何かを育むことが、もっとたいへんなような気がします」⁽²³⁾

(21) 韓立紅. 日本文化概论. 南开大学出版社, 2008年, 第1版, P5. 原文“其对固有文化的保守性(中略)固有的宗教意识、固有的道德伦理意识、固有的生活习惯等一直支配着日本人的思想与生活”。

(22) 木村時夫. 日本文化の伝統と変容. 成文堂, 1990年, P273.

(23) 井上謙・半田美永・宮内淳子. 有吉佐和子の世界. 翰林書房, 2004年, P85-86.

と、異なる意見をあらわした。有吉佐和子は伝統を尊重し、それを発展させようという気持ちが明らかである。

話しが進むと、二人はまた歌舞伎について深くまで討論してきた。伝統は動いていくはずなのに、徳川末期でとまり、そのままの形できていた能への有吉佐和子の嫌気にたいし、岡本は「浄瑠璃にしても、歌舞伎にしても、能を否定した形できたわけでしょう」「能という、決まった形を否定しても歌舞伎という新しい分野でそのスピリットを発展させていったわけだ」といった。いろいろ話しははずみ、ここでいちいち引用する必要もないが、最後に、有吉佐和子は独自の感想を述べた。「歌舞伎の場合は伝統を否定していった形の流れと、その流れの中から一つ一つフォームを洗い上げていくという二つのものがある、それが現在にまできている。歌舞伎が魅力的な理由です。先生は、私が伝統という言葉を理解していないとおっしゃったけれど、否定していく形の伝統と、創造していく形の伝統がある。伝統という一つの言葉しかないから誤解が生まれているわけですが……」と。「創造していくってことは、いや応なしに否定して行くことですよ」と岡本が付け加えたが、それに対し、有吉佐和子も「そうです」と納得した⁽²⁴⁾。ここで、二人がいった「伝統」とは、必ずとまっているものではない。有吉佐和子の考えによると、その流れとして、「否定していく形の伝統」と「創造していく形の伝統」という二つのものがある。そのうち、「創造していく形の伝統」はまた、「否定していく形の伝統」つまり他のなにか古いと思われるものを否定していくものから発展してきたものである。

したがって、伝統は否定の否定が積み重ねられているうちに、進行していくものであろう。こういう考えは先に述べた女性三世代の関係と一致している。岡本太郎と有吉佐和子のこの対談は1958年4月に、『中央公論』に掲載されたものであるが、「伝統」に対する考えは、そのまま翌年世に出た『紀ノ川』を支えている作者の思想になると考えられる。

花の祖母豊乃、花、そして文緒の娘華子へと隔世でたどられる三代の女は、互いになにか肯定的な共通の意識を共有していたようである。その理由は、東京女子大学に通っている華子が祖母への手紙で書いた「隔世遺伝」という言葉にある。華子は有吉佐和子の分身として、この手紙において、伝統に関する考えを一つも

(24) 井上謙・半田美永・宮内淳子、有吉佐和子の世界、翰林書房、2004年、P88-90。

言い落とさず、明らかに述べている。

「(前略) 華子はママのように「家」というものには反撥を感じません。ママが反撥したおかげで、「家」は華子の頭の上に決してのしかかってくる心配がありませんから。

おばあさま。妙なことをいうようですけれど、華子はこのごろ隔世遺伝という言葉をはひょいと思ひ出すんです。ママのおかげで、華子は他の孫よりも強くおばあさまに近寄れたような気がするからなのです。これは、おばあさまも六十谷でよくおっしゃっていらっしゃいましたね。御存知のように、華子はママの母校である東京女子大学に通っています。同じ英文科に入りながら、多分ママとはひどく違う表情で辞書をひいているのだろうと思います。(中略)

私が大学のことをいいだしたのは、たまたま英文学の研究中に、T・S・エリオットというひとがこんなことをいっているのを発見したからなんです。「我々は伝統という言葉を否定的な意味でしか使うことができない」伝統というのは、どんなものなのか私には怖ろしくてよく分かりませんが、前のものを否定し、つぎのものがまたそれを否定するという形でのみ伝えられるものだというエリオットの考え方から、私は何か精神的に会得するものがありました。それは、おばあさまと私との繋り方を連想したからです。おばあさまからママへ、ママから私へ、やっぱり「家」の心は流れているのだなあ、と華子は思いました。」⁽²⁵⁾

手紙で言及されたT・S・エリオット⁽²⁶⁾はイギリスの詩人、劇作家、文芸批評家であり、『紀ノ川』のこの一節には、彼の影響が濃厚に見られる。一般にエリオットの「伝統論」というと、「伝統と個人の才能」をさすが、有吉佐和子がかぎ括弧で括った部分はみあたらない。「前のものを否定し、つぎのものがまたそれを否定するという形でのみ伝えられるものだというエリオットの考え」とは、彼の出世作「伝統と個人の才能」に始まる基本概念である。有吉佐和子と同じように、伝統を動いているものとして理解しており、伝統への盲従は彼が厳しく否定したのであった。「もし、伝統ということの、つまり伝えのこすということの、唯一の形式が、われわれのすぐまえの世代の収めた成果を墨守して、盲目的にもしくはおずおずとその行きかたに追従するということにあるのなら、「伝統」とは、

(25) 有吉佐和子。『紀ノ川』。新潮文庫、1964年、P268-270。

(26) T・S・エリオット。正式な名前はトマス・スターンズ・エリオット (Thomas Stearns Eliot) で、イギリスの詩人、劇作家、文芸批評家である。

ははっきりと否定すべきものであろう」⁽²⁷⁾と、述べられているように、エリオットの伝統継承の思想には、批評や懐疑の精神が前提となっていた。

エリオットはまた伝統を苦勞して手に入れるものとして理解している。「伝統ははるかに広い意義を持つものである。伝統は相続することができない。もし伝統を必要とするのなら、大いに苦勞して手に入れなければならない。伝統は、まず第一に、歴史的感覚を含んでいる。……そして、歴史的感覚は、過去は過去としてあるという知覚だけではなく、過去は現在の中もあるという知覚を含んでいる」⁽²⁸⁾と、エリオットは伝統というのが否定的な意味で使われており、意識的な努力を必要とするものであると強調し、伝統は過去、現在をつらぬく精神的な流れであることを指摘した。

伝統をただ無批判的に受け継ぐのではなく、努力を持って意識的に過去に対抗し、未来に向かい、また未来の何かに否定されるだろうかという意識を持ちながら、現在を積極的に生きるという態度を明らかにしている。そこには、否定の否定を積み重ね、流れている伝統を発展させようとする弁証法的な発想がある。有吉佐和子がエリオットに「会得」したのは、この点であると思う。

「昔も人間が生きていたように、これから人間が生きることも、いいことなのだと思えてきて、今は苦しい生活ですが明日を見て生きようという気になれて……」⁽²⁹⁾、人間は自らの信じる方向に向かって生き、たとえそれが過った方向だったとしても、それは次の世代によって否定的に引き継がれてゆけばよい。伝統、すなわち人間に必要とされる精神の継承は、否定、否定の否定、否定の否定の否定……と無限に続く否定の弁証法であるという作者の伝統観が明らかになる。

したがって、伝統は静的、固定的なものではない。伝統を紀ノ川のような動的、発展的なもの、歴史のなかの「精神的な流れ」としてとらえなければならない。否定の否定を繰り返しているうち、新しいものが生み出されてくる。時間の経つに従い、その「新しいもの」がまた「過去のもの」として伝統と一体となり、その流れのごく自然な一部分となる。有吉佐和子の思想の根底には、こういう

(27) 深瀬基寛訳、伝統と個人の才能、エリオット全集・第五巻（改訂版）、中央公論社、1971年、P202。

(28) 深瀬基寛訳、伝統と個人の才能、エリオット全集・第五巻（改訂版）、中央公論社、1971年、P251。

(29) 有吉佐和子、紀ノ川、新潮文庫、1964年、P270。

「否定の否定」という弁証法的な「日本回帰思想」があるといえよう。

四、おわりに

以上、本稿では『紀ノ川』における「日本回帰思想」に注目し考察を行った。経済の高度成長がもたらした「日本回帰」の盛期の五、六十年代に発表された『紀ノ川』は、明治・大正・昭和の女性三世代の葛藤によって、作者の有吉佐和子の伝統文化にたいする認識が作品に潜ませられている。すなわち伝統をただ無批判的に受け継ぐのではなく、努力を持って意識的に過去に対抗し、また未来に否定されるだろうかという意識を持ちながら、現在を積極的に生きるという態度が明らかになる。有吉佐和子の思想の根底には、否定の否定を積み重ね、流れている伝統を発展させようとする「日本回帰思想」があるといえる。

本稿は時代特徴を背景に論述してみたものであるが、作品には、時代と文化の特徴もみられる。『紀ノ川』における女性三世代の関係に対する描写と有吉佐和子の伝統観は特定の時代及び日本文化の発展から生まれたものであるといえよう。

参考文献

- 青木保. 日本文化論の変容. 中央公論社, 1990年。
井上謙・半田美永・宮内淳子. 有吉佐和子の世界. 翰林書房, 2004年。
有吉佐和子. 作家の自伝109有吉佐和子. 日本図書センター, 2000年。
石田一良. 日本文化史—日本の心と形. 東海大学出版会, 1989年。
有吉佐和子. 紀ノ川. 新潮文庫, 1964年。
石井進・笠原一男. 詳説日本史. 山川出版社, 1996年。
新保哲. 日本の文化思想史. 北樹出版, 1994年。
韩立红. 日本文化概论 (第一版). 南开大学出版社, 2008年。
木村時夫. 日本文化の伝統と変容. 成文堂, 1990年。
深瀬基寛訳. エリオット全集・第五卷 (改訂版). 中央公論社, 1971年。

